

学生歌誕生によせて

種智院大学自治会々長 中山全条

昨年十一月降誕会実行委員長を兼任して、昭和四十四年降誕会はいろいろと委員の諸君と相談をした。その場で我々の大学は大学独自の歌や校歌を有しない、そこで四十四年降誕会記念行事の一つとして学生歌を作ろうと言う事に成り、早速昨年末の緊急学生総会に提出し、学生諸君の承認を得た。それから作詞作曲者のことを委員会において話し合ったが、単なる替歌や一年だけの物にしない為、大学当局とも相談した方が良く、この趣旨を鳥越学監に御相談した。学監は我々のこの趣意に賛成下さり、そこで最終的に作詞を我が大学の鳥越教授に依頼し、また作曲も大学に縁の深い山下先生に依頼することで意見がまとまり、早速先生方に御頼みし、何とか引受けて戴くことが出来た。その結果このような我が大学の姿を示す立派な物が出来たことを学生一同心から喜びたい。最後に高藤、山下の両先生を始め鳥越学監の御行為に対して心から感謝いたします。

昭和四十四年六月十五日

学生歌の完成を祝して

種智院大学々監 鳥越正道

「我々がみんなであつた歌を……」という本学学生諸君の願いは久しかった。戦前（もちろん旧教育制度の時代）に一度校歌が作られたが、あまりうたわれることもなく、また時代も一変してしまつたのである。元来、学校には校歌があるのが当然であろうが、中学高校はともかく、『大学の校歌』というのはいまだ聞かない。あるといつてもそれは大抵は寮歌や応援歌のようである。

このたび学生諸君の間から、学生歌を作ろうという自発的なムードがにわかに高まって来たのは本當にうれしいことである。幸い学生諸君の大先輩である国文学の高藤先生が、宗祖大師立教開宗の大理想と、本学建学の精神を十分に盛りこんで作詞され、また、これに京都吹奏楽界の雄、山下先生が学生の若い気持を考慮して作曲されたこの学生歌は、歌詞、曲ともに学生諸君の要望をよく満たしていることと思う。しかもこの学生歌が、宗祖大師の降誕会に際して発表されるというのは、まことに時宜にかなつたことと思ひ、欣快にたえない。

願わくは、この学生歌が末ながく、いつでも、どこでも、学生諸君によつて声高らかに唱和されることをと、ひたすら念ずる次第である。

昭和四十四年六月

附記 高藤黄茅子

鳥越学監と中山会長から作詞を言いつけられて、断りつづけはしたものの、内心では、最終的には自分がやらねばならなくなるだろうと、自分なら「かくかく」と、帰途のバスの中で構想を練つてみた。そしてテーマとしては、本学が大師以来の事教二相教学の淵藪であり、輝く伝統を保ちつつ、空間的には世界へ、時間的には未来に発展すべきことを謳歌してみようということであつた。

しかし弘法大師の名や、教義の内容を露骨に詞にすることは避けて、具体的なものを以てそれを象徴するように行かぬかと考えた。

形式としては起承転結の四節、各節は五七三句に五で終わる変型——万葉から古今への過渡期に歌調は五七から七五に転じ、以来、日本人の韻文意識は七五調オンリーで、稀に、万葉の五七調を作曲してもしつくりしない。やや成功したかに見えるのは、戦時中、信時潔が作曲した讚美歌調の「海ゆかば」一つくらいであろうか。五七は莊重で下手すると鈍重に、七五は軽快ではあるがオッチョコチョイの尻軽調になる懼れがある。深奥な密教思想を下敷きにするのだから莊重に、というのでは常識を一步も出ない。またゴーゴー張りの現代青年が歌うのだからといって、校歌に準ずべきものをそうもなるまい。——作曲の成功率の乏しい五七、これをくり返へして七で据えれば万葉の長歌と同じになる。そこで五七を三回くり返へして五で据える。新しい変型である。作曲担当の先生に期待する。

さて内容であるが、生命の宗教といはれるその生命の象徴として光と水、光は遍照光であり大日である。大日は大師と重なる。大師によつてもたらされたアジアの光、それは世界的でありまた教相の面を踏まえている。以て第一節起句とする。

第二節は、生命の光を承けて水がテーマとなる。密教の伝燈は灌頂という儀式に集約せられて脉々相承する、事相の面である。

論語に「子在川上曰逝者如斯夫不舍昼夜」とある、広く深く永遠につづく水。

第三節転句は綺芸種智院の理念がテーマである。教育文化の濫觴として、その精神は永遠に讃えらるべきであらう。

かかる伝統を負い、精神を継ぐ学徒の未来への責務と覚悟を高唱して第四節結句とする。

などと大層なことを述べはするものの、文辞拙く才足らず、所期の半ばにも達しないのは遺憾である。後学の士に期待した。